分析的読解を取り入れた文章表現活動

吉田美登利

要旨

本研究は，分析的読解を取り入れた文章表現活動の実践研究である。この活動の目的は，書く作業に読解を関連させることにより，読解で得た文章に関する知識を文章産出の際に生かせるようにすることである。学習者の産出物を分析した結果，(1) 分析的読解とアウトライン作成を行うことにより，文章全体の構造を考えて書けるようになった。(2) 学習者は，分析的読解を通して，言葉，構成，内容など，自分の苦手な箇所を参考にし，文章表現活動に取り入れていた。(3) 母語の作文教育における，モデル作文を使った学習経験の有無は，今回の分析的読解をつかった文章表現活動には，特に影響を与えていないことが分かった。ここから，分析的読解を行うことより，学習者が文章構造を自ら考え，主体的に文章表現活動に応用していることが分かった。また，それぞれの学習者の苦手な箇所や，レベルに合わせた学習が行なえるという結果が示された。

キーワード：　アカデミック・ライティング　タスク　文章構造　意見文

1.　はじめに

書くことと読むことは，深い関係にあるといわれる。書くことは，4 技能のうち，最後に身につくものとされるが，その前段階である読むことを通して，文字や文章についての知識を得て，それが基礎になって，はじめて書き始めることができる。言語の習得段階の過程にある子供や，日本語学習者だけでなく，成人の日本語母語話者も，書きなれないジャンルの文章を書く際には，いくつかの文章を参考にして，その構造[1]や文章スタイルを分析的に読解した上で，自らが書こうとする文章の参考にすることが多い。また,効率的な書き手が文章を書く際は，書きながら絶えず読み返しが行われ，モニタリングされる（内田 1990，Hayes,J.R.&Flower,L.S. 1980)。

このように書くという活動は，自分の文章を読み手の視点で客観的に見ることが必要になり，読むことと切り離せないものである。本稿では，このような「書くこと」と関係が深い「読むこと」を日本語文章産出に取り入れた指導について考察したい。

2.　先行研究

読解を取り入れた文章表現活動として代表的なものに「モデル作文」があげられる。たとえば，初級の作文のテキスト『みんなの日本語初級　やさしい作文』では，それぞれのテーマにあわせた談話展開をフローチャートで示すとともに，「モデル文」を提示することによって，書く際の参考にさせている。初級の学習者にとって，このような談話展開とモデル作文を参考にできることは，大きな助けになると考えられる。

また,読解活動を通して学んだことを,文章表現活動に生かす取り組みとして，次のような研究があげられる。井下（2001）は，日本人大学生を対象に，説明文の事実と意見を識別する文章読解を行わせ，その作業後の大学生の意見文の産出過程にどのような影響を与えているかを検証している。その結果，この識別課題は文章を産出する際に，事実や意見をどう表現すればよいか考える機会を与えていたことから，文章を書くための基礎学習として，一つの役割を担っていることを確認している。

読解活動は，文章の形式だけではなく，内容がどうあるべきかを考えさせる際にも効果的である。市川（2001）によると「現在の国語教育では，教科書にある「優れた」教材文を「正しく」読み取ることが中心になっている。しかし私たちが日常生活で出会う文章とは,けっしてそのような模範的なものばかりではない。（中略）また，仮に立派な書き手が，真摯に書いた説明文や論説文であっても，それを鵜のみにするのではなく，十分検討して自分なりの意見を持つことは必要である（p.244)」としている。そして「批判的読解」の学習では,「最終的には,自分の意見をより納得できるものとし，説得的に表現することが目的である（p.253)」と述べている。このような批判的読解は，説得力のある文章はどういうものであるかを考える機会を与えるもので，市川が言うように，自らの主張を表現する際の前段階の訓練として有効であり，外国人学習者を対象とした日本語教育への応用も可能であると考えられる。

以上のように先行研究では，読解と文章表現活動とを結びつけたものや，日本語テキストでモデル作文が参考として挙げられているものが多い。しかし，第二言語としての日本語教育で，実際の授業場面における実践研究はあまり報告されていない。そこで，本研究では，アカデミック・ライティングの前段階[2]の授業に，分析的読解をとりいれ，学習者それぞれが，自ら考える事を通して，主体的に文章表現活動に取り組めることを目指した活動を行った。

3.　「分析的読解」の定義

本研究では分析的読解を，読解対象となる文章の構成要素（構造，内容，表現など）について学習者が様々な側面から考えながら読むことと定義する。単にモ

デル作文のまねをして書くのではなく，文章を注意深く観察することにより，学習者自らが書く際のヒントを読み取り，それを文章産出に生かすことを目指している。読解の対象とする文章は，必ずしもモデルとなるような理想的な文章でなくてもよく，そのような読解課題に対し，なぜ良くない文章といえるのか，どう直せばよいかなどを，読み手である学習者それぞれが考えることが大切であると考える。

4. 調査目的および方法

4．1 調査目的

本研究の目的は「アカデミック・ライティングの前段階の中級レベルの日本語学習者に対し，分析的読解を取り入れた文章表現指導をおこなうことは，文章産出において効果的である」という仮説を検証することである。また，学習者それぞれが読解活動を通して，教師が指示したタスク以外から，主体的にどのようなものを取り入れているかを明らかにすることである。

4.2 実施時期と対象者

実施時期は 2005 年 4 月～6 月，計 7 回(4/25, 5/16, 5/23, 6/6, 6/13, 6/20, 6/27)。クラスは 12 名で，そのうち調査協力者は 8 名である（韓国 5，中国 2，タイ 1)。授業は日本留学試験の記述試験対策であった。この授業を通して，大学・大学院での論文･レポート作成能力の基礎となる力を身につけさせることを目標とした。具体的には，自分の意見を明確に他者に伝えることや，その意見に説得力のある根拠を述べ，論理的に整合性のある文章を作成することを目指した。

授業開始時に，学習者の作文に対する意識を調べるため，質問紙による調査[3]を行った。この調査により，このクラスは作文に対する苦手意識が非常に強いことが分かった。その理由は，何を書いていいかアイディアが浮かびにくいこと，外国語で書くことに困難を感じ，また，母語作文そのものも苦手だということであった。そこで，このような問題を解決するために，構想，構成という書くプロセスを段階的に学んでいくことで，学習者の負担を極力減らすように授業計画を立て実施した。

4.3 クラス活動の流れ

授業は計 7 回（90 分×7）行った。はじめの 5 回は，意見文（ここでは賛成・反対のどちらかの立場にたって意見を述べる形式のもの）を扱い，400 字程度書くことを目標とした[4]。毎回のクラス活動の流れは，次の通りである。授業ではまず, 30 分程度, 前回に書いた文章の復習をした。教師のフィードバックに加え，自己訂正，グループで文章を交換し読みあうなどの活動も行った。次に，新しい課題についてアイディアシート（吉田 2005）を使った構想・構成指導を行った。

このシートを使って個人活動でアイディア想起を行い，課題に関連するアイディアをできるだけ多くあげさせ，そこからアウトラインを作成させた。このような書く前の作業に 25 分程度，その後，制限時間 35 分で文章を書かせた。

以上のように，計 5 回の授業を行った後，まとめの活動として「新聞投書」という実際のコミュニケーション活動を取り入れた授業を行った。この新聞投書を授業に取り入れたのは，制限字数が同じく 400 字程度であること，また自分の意見を述べる形式という点が似ていることから，これまでに練習してきたことを応用できるまとめの活動として，ふさわしいと考えたからである。全 2 回のうち，1 回目に投書を書き，2 回目に内容を見直し，清書を行った。

4．4　分析的読解を取り入れた活動

分析的読解は，時間の都合上，作文授業 2 回に 1 回のペース（第 1 回，第 3 回，第 5 回）で，授業のはじめの書く活動の前に行った。読解課題は，筆者が採集した日本人の文章や，日本語テキストに参考としてあげられている文章で，これから書こうとしている文章と同じジャンル（意見文）で，違う課題のものを 2,3 編提示した。ここで違う課題のものを使用したのは，意見内容の模倣にならないようにするためである。1 回目に使用した文章は，基本的な文章構造[5]の参考になるようなもの，3 回目，5 回目は，それに加え，複雑な構造の例も示し，一歩進んだ文章を書きたい学習者の参考にできるようにした。

文章を分析的に読むことにより，文章産出の際に生かせるものは様々あると考えられるが，今回の授業では，文章構造を学ぶことを主な目的にした。分析的読解では，(1) 文章における主張を探す。(2) その根拠として挙げられているものを探す，というタスクを提示した。この二つのタスクにより，文章の構造（頭括型，尾括型，両括型など）を学ぶことが出来る。そして最後に，(3) 根拠が主張に対してなぜ妥当であり，説得力がある根拠かを考えさせた。

一般的に，文章の型をはじめから学習者に提示するようなタイプの作文指導も広く行なわれている。しかし，文章の型というのは，どのようなタイプの文章にも使えるものではなく，伝えたい内容やジャンルによって相応しい型が変わってくる。そのため，分析的読解活動には，実際の文章を通して，文章構造を学べるという利点があると考えられる。

5．　結果

5.1　文章構造

授業で書かれた文章のうち，規定の字数（340 字以上）に達したもの[5]を分析対象とした。今回の授業で書かれた文章（20 編）は，全て段落が明示されていた。昨年までのクラスでは，段落を作ることを忘れて書き進めてしまう学習者が何人

かいたが，今回はそのような傾向は見られなかった。その理由としては，分析的読解で,「主張」と「根拠」を探すという活動から，文章をいくつかの意味のまとまりとして捉えるというトレーニングができたこと，加えて，アウトラインを作ることで，プランを考えてから書き始めることが出来たという 2 つの原因が考えられるだろう。文章の型は，両括型 19，頭括型 1 であり，すべて主張が文頭に書かれていた。

表 1　学習者の産出した文章の型

	課題 1	課題 2	課題 3	課題 4	課題 5	合計
(1)主張＋根拠＋根拠(頭括型)				1		1
(2)主張＋根拠＋根拠＋主張(両括型)	1	1	3	2	2	9
(3)主張＋根拠＋反論への予防＋主張(両括型)	3	3	3	1		10
(4)前置き＋反対意見の弱点＋自説の有利な点＋主張（尾括型）						0
合計	4	4	6	4	2	20

学習者に使用された文章の型で多かったものは，次の二つ「主張＋根拠＋根拠＋主張（両括型)」,「主張＋理由＋反論への予防＋主張（両括型)」であった。例として，それぞれのアウトラインと文章を次にあげる。

例 1　アウトライン（課題 3)

高い階がいいと思う
　景色がいいし低い階よりうるさくないし
　虫もあまりいない
　生活の邪魔が低い階よりない

文章　「主張＋根拠＋根拠+主張（両括型)」

〔主張〕〔根拠〕

私は高い階に住むほうがいい，と言います。(主張)

第 1 の理由は，本当に高いビルだったら低い階に住むよりは景色がいいです。お客が高層マンションをえらぶ時はいちばんの理由はまわりのかんきょううだと思います。

〔根拠〕〔根拠〕〔主張〕

第 2 の理由は，低い階よりうるさくないのである。
もし高層マンションが駅のすぐよこにあるというと，低い階は高い階より物すごいうるさいです。そのうえに車だけではなくよる遅い時間まで酒を飲み過ぎてよっぱらってうるさい声を出す人もいますのでたいへんです。
第 3 の理由は，虫がいっぱいあります。なつになると，高い階よりカとかごきぶりとか本当にやすくてできてしまいます。自分たちがしっかりそうじだといっでもどうりょくに反してさがあります。第 1 第 2 第 3 の理由でちゃんと考えてみると，私は高い階に住むのがいいと思います。（主張）

例 1 は,「主張＋根拠＋根拠+主張（両括型)」のものである。読解課題で提示したものは，根拠を二つ挙げるタイプの文章だけであったが，ここでは，根拠を大きく三つの意味のまとまりとして捉え，それを段落ごとに示している。分析的読解で文章構造を学び，アウトラインを作ることにより，構成を考えて書き出すことができたといえるだろう。次は,「主張＋理由＋反論への予防＋主張（両括型)」の例を挙げる。

例 2　アウトライン（課題 2)

一つのことがいい
① 専門性がある
③ すきなこと勉強して楽しみがある。
④ じょうしきとかかんがえかたのはばがせまくなるかもしれない。
②しゅうしょくするとき自分がやりたいしことがはっきりできている。

文章　「主張＋理由＋反論への予防＋主張（両括型)」

〔主張〕〔根拠〕〔根拠〕

私は大学では，一つのことを深く学んだほうが良いという意見に賛成だ。（主張）
一つのことについて 4 年間べんきょうするので卒業する時には専門家だといわれても良いほどの知識をとることができると思う，どんな仕事が自分に合うかまようことなく，自身がある分野ではたらけるのも大切なことだと思う。
学ぶ時，自分が関心があることはもっと勉強したいという気持ちになる場合があるだろう。同じことが好きな人々と意見をこうかんしたり，先生に聞いたりして，勉強するのがもっと楽しくなると思う。

〔反論への予防〕〔主張〕

じょうしきとか考え方のはばがせまくなるかもしれないが，そんなことは学科以外の活動とか教養科目のじゅぎょうなどのコースで十分にとれることではないだろうか。

大学で学べることは色々あるけれど，大学を卒業した人は自分の専功に専門性をとるのが一番大切だと思うので，一つのことを深く学んだほうが良いと考える。（主張）

この学習者は，アウトラインを書く際にまず結論を書いた後，根拠をならべ，それに順序を付け，構成を考え直している。書き上げた文章を見てみると，根拠が書かれた第二段落には，アウトラインの①②を合わせて，一つの段落が作られていることがわかる。また，例 1 と例 2 は共に，文章末にみられる主張が，アウトラインの際は書かれていなかったが，これは，書き手にとって文頭の主張のほうが，文末のものより重要であった，あるいは実際に書き上げた際に，字数が足りず，主張を再度繰り返す形で書き足した可能性が考えられる。

5.2　主張と根拠の関係

分析的読解では，文章の型などの形式面だけではなく，内容面でも読解課題から学ぶことを目指している。ここでは，例として第三回目の授業で使用した読解課題を取り上げる。この時の読解課題では，学習者に，主張と根拠の関係を考えさせることにより，説得力を持った文章を書くための参考にさせた。

例 3　分析的読解の課題とした文章例[7]

私は大学では一つのことを深く学んだほうが良いという意見に賛成である。理由は今の時代，社会で求められるのは，広く浅い知識・技術を持つゼネラリストより，一つの専門的な能力を持つスペシャリストだからである。

一昔前まで，企業での新規人事採用の場面において求められたのは，大学院などで専門的な能力を身につけた学生ではなく，若くつぶしの効く学生であった。それは，入社後に自社にあうよう教育していくことを前提としていたからである。それには確固とした自分を持っている「大人」より柔軟性のある若者の方が都合がいい。

しかしバブルの崩壊後，将来性が未知数である若者を大量に養うほど余裕のある会社はほとんどなくなった。はじめからある程度計算できる能力の持ち主を採用するように変化してきたのである。そのため，今の社会状況を考えると，大学では一つの専門を極めたほうが，将来社会に出る際に有利であると考える。

ここでは，主張に対する根拠「バブル崩壊後の今の社会で求められているのは

スペシャリストだから」と条件を限定する方法で，説得力を強めている。そのため第三回目の授業では，これを参考にした「根拠で条件を限定することにより，説得力を高める」という方法で文章を書く学生が多く見られた。

次にあげる例 3 では，「現代社会」という条件をつけることにより，「家は休むという機能が大切」には「高い階に住んだほうがよい」という主張の根拠としている。

例 3　学習者の文章例

> 私は高層マンションの高い階に住んだ方がいいという意見に賛成だ。（主張）
> 現代社会の家は，何より休みところという意味が一番大切だと思う。高い階から見えるきれいなけしきはつかれたこころに役に立つ。いくらきれいなけしきがあってもうるさいなら人は休まない。別の人が行ったり来ったりする音も聞こえないし，それから他人の目にも気にならなくてもいいから，落ち着いて休すむことができる。（後略）

他の学習者の中にも，これと同様に条件を限定して説得力を高める方法を使い，「子供がすぐに外に遊びに行けるように，低い階に住むほうがよい」，「日本は地震などの災害が多いので低い階に住むほうがいい」，などの文章例も見られた。

5.3　学習者は分析的読解で何を読み取っているか

分析的読解作業のタスクとして教師が提示したものは，主張を探す，その主張の根拠を探すというもので，それにより文章構造を学ぶものであった。しかし，学習者はそれ以外にも分析的読解を自ら行い，文章表現の参考にしているようであった。何を参考にしていたか調べるために，5 回目の分析的読解の授業直後に質問紙によるアンケートを行った（表 2）。

表 2　日本語分析的読解の課題を参考にしたか

	日本語読解課題を参考にしたか	参考項目				
		構成	内容	漢字	言葉	その他
学習者 1	少し参考にした				○	
学習者 2	少し参考にした	○			○	
学習者 3	とても参考にした			○	○	
学習者 4	少し参考にした				○	
学習者 5	少し参考にした	○			○	○
学習者 6	少し参考にした	○				
学習者 7	少し参考にした		○		○	
学習者 8	とても参考にした	○	○	○	○	

8 人中，教師が分析的読解の課題として提示した文章を，「とても参考にした」学習者が 2 人，「少し参考にした」6 人，「参考にしなかった」0 人であり，全員が

読解の文章を，自らが文章を書く際の参考にしていた。参考項目の内訳は,「言葉の使い方（助詞，活用，文末の言い方など)」7 人,「文章の構成」4 人,「内容」2 人,「漢字」2 人（複数回答）であった。学習者 8 のように，すべてを参考にしている学習者がいる一方，言葉の使い方のみを参考にしている学習者もいて，各自が自分のレベルやニーズに合わせて，読解課題を参考にしていることがうかがえた。

表 3　母語の作文でモデル作文を参考にしたか

	母語のモデル作文を参考にしたか	参考項目			
		構成	内容	言葉	その他
学習者 1	参考にしない				
学習者 2	参考にしない				
学習者 3	少し参考にした	○			
学習者 4	参考にしない				
学習者 5	よく参考にした	○			
学習者 6	少し参考にした	○			
学習者 7	少し参考にした	○			
学習者 8	少し参考にした	○			

このような個人差が出た理由として，母語の作文教育でモデル作文による教育が行われ，それを日本語作文でも行った可能性が考えられる。そこで，母語でも他の文章を参考にして作文を書いていたかどうかを調査した（表 3)。その結果,「よく参考にしていた」1 人,「少し参考にしていた」4 人,「参考にしていなかった」3 人であった。母語では何を参考にしていたかについては，5 人全員が,「文章の構成」をあげており，その他の回答は見られなかった。今回の調査では，母語のモデル作文を使った文章表現の学習経験の有無は，日本語の分析的読解を使った文章表現活動に影響を与えていないことが分かった。

6. まとめの活動としての新聞投書の授業

意見文学習のまとめの活動として，新聞投書の授業を行なった。書く前作業として,投書というジャンルにおける読み手や，書く目的を考えさせ，各国の投書事情について紹介しあった。また，日本語で，新聞投書を読んだことがないということから，参考として留学生の投書 2 編[8]を紹介した。しかしその際，分析的読解のためのタスクは提示しなかった。それは，比較的文章が読みやすいことに加え，教師がタスクを与えなくても，文章構造や内容を自ら考え，参考にすることができる段階にあると判断したためである。

8 編中 7 編の文章の書き出しは,「私は日本に来て 1 年になる留学生です。」「○国から日本に留学して 1 年になりました。」などで始まっていたが，これは参考にさせた投書の書き出しに習ったものであった。この形式をとっていなかった残り 1 人の学習者の文章も，日本に留学した理由を述べるという形式で，これも，も

う 1 つの投書の書き出しを参考にしており，8 人全員が書き出しを参考にしていたことが分かった。文章を書く際は,一般的に書き出しや終わりが難しいとされ，そのような部分を参考にしたと思われる。

文章の書き出しを参考にすることは，書き出しのみでなく，文章全体の構造に影響を与える。上に挙げたような書き出しで始まった場合，結論が最初に来る頭括型，両括型などの文章構造にはなりにくく，エピソードを語る形で文章が構成される可能性が高くなるだろう。

学習者の書いた投書の内容は，8 編中，日本人への提言（自国との比較によるもの，政治，文化など）4 編，エッセイ（留学生活を書いたものなど）4 編などであり，文章の型は頭括型 1，尾括 7 編であった。それまで書いていた意見文が，両括型，頭括型がほとんどであったことを考えると，分析的読解を行ったことにより，投書というジャンルにあわせて全体の文章構造を変えたことが分かる。このことから，学習者は文章から各自が参考になるものを，選択して，使用することが出来るようになっていたといえるだろう。

7. 結果のまとめと考察

学習者の産出物（アウトライン・文章）と，この文章表現活動を行なったアンケートの記述を質的に分析した結果，次のことが明らかになった。(1) 分析的読解とアウトライン作成を行うことにより，文章全体の構造を考えて書けるようになった。学習者全員の作文には，段落が作られ，意味のまとまりが意識されるようになり，結論（主張）が明示されていた。(2) 学習者は，分析的読解を通して，言葉，構成，内容など，自分の苦手な箇所を参考にし，文章表現活動に取り入れていた。(3) 母語の作文教育における，モデル作文を使った学習経験の有無は，今回の分析的読解をつかった文章表現活動には，特に影響を与えないことが分かった。

以上の結果から，このような活動を行うことより，学習者がこれから産出しようとしている文章に，文章構造を主とした分析的読解で得た知識を，主体的に文章表現活動に利用していることが分かった。また，それぞれの学習者のレベルに合わせた文章産出が行なえるという長所が示された。

8. 今後の課題

本研究は，実際の授業の中で行なったものである。そのため，7.(1)「分析的読解とアウトライン作成を行うことにより，文章全体の構造を考えて書けるようになった。学習者全員の作文には，段落が作られ，意味のまとまりが意識されるようになり，結論（主張）が明示されていた」という効果が，分析的読解，アウト

ライン作成のそれぞれの段階で，どのような効果を生んでいたのかを検証することはできなかった。今後の課題としたい。加えて，分析的読解に使う文章についても，改善が必要だろう。今回は筆者が集めた作文データを使うことが多かったが，できるだけ読む価値があるもの，生のものを使用するようにしたい。また，クラス内で読解能力に差がある場合，読むことが苦手な学習者でも，分析的読解が行えるような個別の支援が必要になる場合もあるだろう。

今回対象としたのは，中級レベルの学習者で，400 字程度のまとまった意見文を書くのがはじめてだったため，文章の構造理解を中心に分析的読解活動を行なった。学習者にあわせて，分析対象の文章とタスクを変えれば，様々なレベルの学習者への応用が可能になると思われる。たとえば，実際のアカデミック・ライティングのレベルにおいては，分析的読解課題として，学習者それぞれの専門の論文を用い，それぞれに文章構造や表現形式を読み取るためのタスクを提示するなどの方法が考えられる。また，日本語学習の早い段階で，分析的読解を行えるようになれば，仕事や生活で何かを書く必要に迫られたとき，自ら他人の文章を参考にして，教わったことのない新しいジャンルの文章もそれほど苦労なく書けるようになるのではないかと思われる。

付記： 本稿は，2005 年 8 月に中国西安で行われた第三回大学日本語教育国際シンポジウムで口頭発表した内容に，加筆修正したものである。

注

1. 永野（1986:79）では，「構想」「構成」「構造」について次のように述べている。(1) 文章の構想　主題または題材を，どのような文章の構造で叙述しようとするかを，文章の構想と言う。(2) 文章の構成　構想に基づいて実際に書き進めていく手続きを，文章の構成という。(3) 文章の構造　構想に基づき，構成することによって出来上がった文章を，全体として眺め渡したときにみられる結構を，文章の構造という。本稿では，この永野の定義に従い，「構想」「構成」「構造」という語を使用する。
2. 「アカデミック・ライティング」とは，大学・大学院の授業や研究で必要な書くことと定義する。本稿でアカデミック・ライティングの前段階としているのは，大学入学を目指す予備教育の段階における文章表現活動を指す。
3. 質問紙調査では，8 人中，日本語作文が「好き」2,「嫌い」5,「どちらともいえない」1 であった。母語作文は,「好き」1,「嫌い」6,「どちらともいえない」1 であった。母語，日本語作文ともに苦手意識が強いことがうかがわれた。苦手な理由として，日本語作文は,「何を書けばいいか分からない」3,「難しい」3,「外国語で書くのが大変」3,「つまらない」2 であった。母語作文は,「何を書けばいいか分からない」3,「つまらない」2「難しい」2,「そ

の他」2であった（複数回答）。日本語で書くのが難しいという以前に，母語作文が苦手だったという文章表現そのものに対する苦手意識が目立った。

4. 作文課題は以下の5つである。(1) 留学生が住むには田舎がいいか，都会がいいか。(2) 大学では一つのことを深く学んだほうがいいか，いろいろなことを幅広く学んだほうがいいか。(3)マンションに住むなら低い階がいいか，高い階がいいか。(4) お給料が少なくても好きな仕事がいいか，それほどやりがいがなくてもお給料がいい仕事をするほうがいいか。(5) 直接会ってコミュニケーションすることは，手紙やＥメールを使ったコミュニケーションに勝るか。（注：(2) (3) は2003年度日本留学試験記述問題の類題）

5. 分析的読解に使った作文の型は以下のものを使用した。

   (1) 主張＋根拠①＋根拠②（頭括型），(2) 主張＋根拠①＋根拠②+主張（両括型），(3) 主張＋理由＋反論への予防＋主張（両括型），(4) 前置き＋反対意見の弱点＋自説の有利な点＋主張（尾括型）

   本稿で，基本的な文章構造としているのは，(1) (2) (3) の文である。

6. 学習者にとって，このようなまとまった量の意見文を書くのが初めてだったことから，文字数が規定量に満たないものも多かった。また，欠席者もいたことから，20編の分析対象となった。

7. 筆者が採集した日本語母語話者の文章に，多少加筆修正をしたもの。

8. 留学生の2編の投書の内容は，一編が日本人に対する提言，もう一編が，日本と自国の違いについて書かれたエッセイであった。

引用文献

Hayes,J.R.,&Flower,L.(1980). Identifying the organization of writing process. In L.W.Gregg,&E.R.Steinberg(Eds.),*Cognitive process in writing*.Hillsdale,N.J.:Lawrence Erlbaum Associates

市川伸一（2001)「批判的に読み，自分の主張へとつなげる国語学習」『文章理解の心理学　認知，発達，教育の広がりの中で』大村彰道監修，秋田喜代美・久野雅樹編集　pp244-255

井下千以子(2001)『高等教育における文章表現教育に関する研究―大学教養教育と看護基礎教育に向けて』風間書房

内田伸子（1990)『子どもの文章―書くこと考えること―』東京大学出版

スリーエーネットワーク編著(1999)『みんなの日本語初級　やさしい作文』スリーエーネットワーク

永野賢（1986)『文章論総説』朝倉書店

吉田美登利（2005)「文章の構想指導教材「アイディアシート」の活用例」『BATJ Journal 』No.6